

立山・熊野・出羽三山への通過儀礼『初山駈け』の旅

● 小 川 功

I. はじめに

本学の学外実習の一環として平成27年8月31日学生たちと長野県王滝村¹⁾を訪れ、王滝森林鉄道²⁾乗車を皮切りに里宮、遥拝所など各所を巡った折、御嶽での滝修行を初体験させて頂いた。最初は神々しいほどの深山幽谷の奥に鎮座する清冽な滝の水量、轟音、冷温に、小心者の筆者は思わず躊躇したが、引率教員の手前ここで退く訳にいかない。修行を積んだ先達が有難い経文の一句を唱え、さっと指を立て印を結ばれると、さも魔法に掛けられたかのように恐怖心が掻き消え、精神統一でき自然に足は勇躍奈落の滝壺へ…。が、その瞬間、聞きしに勝る寒冷地獄に身震い止まらず、暫し絶句・絶叫・阿鼻叫喚の末に、靈験であろうか不思議にも何故かスカッとした得も言われぬ爽快感に包まれた。日頃の俗界の塵芥はもちろん、日々の重圧・病苦・煩惱一切が洗い流された結果であろうか、心の声で「オレは霊峰・御嶽で一日の内に二カ所もの珍奇な森林鉄道を天翔けた前人未踏の“一日回軌”道の荒行に挑み、かくも過酷な滝行にも見事に耐え抜き通したのだ！矢でも鉄砲でも持ってこい！」とばかりに、恰も自分が一端の行者にでも変身し神仏のご加護を得て、頭の痛い入試・教授会・論文締切等々…世の中に凡そ恐いものなど消え失せたかの如き、妙に昂揚した気分と相成った。これは筆者一人の密やかな体験と思っていたが、先頃同行教員も同様な昂揚体験を話され、筆者も納得した次第である。

こうした靈的な体験は程度の差はあるが、実は若い頃に登拝したいわゆる霊峰・聖地等でも何度か類似のクライマーズハイ³⁾を味わった。本稿⁴⁾では筆者の過去の旅行体験の中から、特に記憶に鮮明な立山・熊野三山・出羽三山への昭和30年代の『初山駈け』の旅を回顧してみたい。おそらく現在、摩訶不思議な観光現象を究めようと日々道なき道・廃線跡に迷い込み「日暮れて道遠し」の窮境に陥っている老生の研究活動の始点・原点がこの辺に在るからである。

筆者の昭和32年7月24日付日記には神戸の裏山・高取山⁵⁾に登った一節があり、当時小学生の筆者の素朴な印象が記載されている。「高取山というのは、いろいろな登山会や宗教団体の山のようなもので…おんたけ教とか、金光教だとか、いなりだとか、天理教のような宗教の社がいっぱいある。…と中は店も宿のようなものもあった。空はいまにも雨をふらしそうなようすだ。頂上へついた時、北の空ですごい稲光がした。そしてとうとうザーと雨がふってきた。すると山はますます神秘的なかんじになった」(立山)

シナイ山ならば崇高なご託宣を得たかもしれぬが、神戸市内の山ゆえこの程度の軽微な靈的衝撃にとどまった。筆者は後述の通り特異な部活を通じて中学生で熊野三山をかけ、高校生で出羽三山を巡拝するという、同世代の生徒たちが経験できなかった山岳信仰に接する機会に恵まれた。当時の稚拙な日記や記録を紐解くことで、筆者自身のどのような観光遍歴から筆者後半生の旅行に関する固有の認識が生み出され強められたか、回顧⁶⁾分析してみたい。

II. 立山登山

平成25年8月27日ゼミ生を連れて立山信仰の拠点であった山麓の芦嶽寺を訪れ、神域と俗界を

隔てる結界・布橋を感慨深く徒渡った。その直前に立山博物館の方から女人禁制の当時女人はこの橋を渡れなかったとの説明を聞いた時、大昔立山の追分小屋で不安そうに見送ってくれた母との別れの情景をふと思出した。筆者は小学6年の昭和32年8月22～25日富山生まれの父に先導されて立山・雄山の頂上に登った。長年この登山は単なる観光だと思い込んでいたが、明治生まれの父は航空工学を学んだ先端技術者であったが、どうやら父の属する地域で継承した作法に従い、一人前の男子に要求される通過儀礼⁷⁾として息子を郷里の立山に参らせたのでは?と推測するようになった。あるいは後に熊野三山、出羽三山等への聖地巡礼にも理解を示し終始支援姿勢をとったのも同様の背景かとも思われるが、今更尋ねようにも両親とも既に亡い。

8月23日千寿ヶ原駅からケーブルで美女平まで、高原バスで弘法小屋を経て、終点追分小屋下車、絵日記には以下の幼い記述がある。「地鉄で二時間ほどかかって立山線の終点までいった。それから、ケーブル、バスとのって追分までいった。立山ケーブルの特長は坂が急なこと、人ばかりでなく荷物もはこぶことだそう…追分小屋で…母やいとこや、おばあさんとわかれ、父と室堂をめざしてあるきだした」(立山)

「ぼくらはべつにあてのあるわけではないのですすめられるままに…いくと中、美久利ヶ池ホテルという所があったので、そこにとまった」(立山)

翌8月24日朝「食事をして、ホテルを出発したのが七時半…ついに雄山頂上に達した。時刻にして午前十時すこし前…三千十五米の高さからみおろしたけしきは言葉でいいあらわせない」(立山)として[写真-1]など「十五枚ほど写真をうつした」(立山)と大感激している。

雲間から一瞬視く剣岳を「剣竜のせなかのようにとんがった剣があつまった山。…雄山なんかとはちがって、岩ばかりの山でなにか陰気な感じのする山」(立山)と恐れ、その後熱湯とガスが吹き出る地獄谷に立ち寄り「ゴォーっといって地の底からきこえてくるような音を出しガスをふきだしている所もある。ぼくはこんなすごいところははじめてみた。今日はもう一日美久利ヶ池ホテルでとまることにした」(立山)

みくりが池ホテルは収容人員200、宿泊料480円と、弘法小屋、追分小屋等の宿泊料400円より少し高いが、「立山のオアシスである碧潭のみくりが池」の前に立地し、高所ながら天然温泉がある内湯旅館である点が売り物であった。2泊目の8月24日、無事登山を終えた気安さもあって



[写真-1] 雄山神社に参拝する筆者(中央、昭和32年8月24日小川幸次撮影)

父親からオーナーに色々質問した。尾近八郎右衛門氏が富山弁で物語る温泉旅館経営の自慢話に相づちを打ち聞き入る父の様子を記憶している。その折に頂戴し、60年後の今も大事に保存している同ホテルのパンフレット⁸⁾には「室堂平は集団施設地区として条件が具備した高原バスの終点となる地点である」などと将来の観光デザインが語られ、添えられた位置図からは「称名バス」の終点が称名小屋、「高原バス」が追分小屋まで通じていたことが判明する。「みくりが池」から近傍の地ではないが、滑川～宇奈月温泉までの電車の先に仙人谷まで「軌道」が描かれている。このパンフレットには「黒部峡谷の景勝」が写真2葉とともに詳しく解説され、「立山と共にけだし、日本の宝というべき」との尾近氏の持論が展開されている。

Ⅲ. 熊野三山

平成16年3月21日前任校の大学院生4名を同行して那智の滝の奥・雲取山の山林を当時研究していた高倉藤平⁹⁾の関係事業の一環として現地調査をした際に、熊野古道沿いに高倉山・高倉峠¹⁰⁾というゆかりの地名が残っていることを地元の方から教えて頂いた。実はその44年前の昭和35年12月25～29日南紀・熊野三山を中学・高校の部活で巡った経験がある。この時期南紀に注目した理由は、当時我々が作成した合宿用冊子に「まず最初に南紀旅行に最も関係の深い紀勢線全線開通について紹介しよう」（南紀）として昭和34年7月15日「四十年ぶりの紀勢線全通―観光の脚光浴びて走るディーゼル車」の記事を転載したことからもうかがえる。夜行で早朝に申本で下車、まだ薄暗く小雨も降る中、傘をさして潮岬の灯台を見て、太地港から観光ブームに乗って進出したばかりの近鉄系・南海系いずれかの巡航船を「13人500円」（集）に値切り、紀の松島の景勝を海上から見て勝浦へ入港した後、「勝浦では夕食のサカナを買出し。犬塚が『観光地やから、ゴツイボオットとる』とブンブン」（昔、p6）に怒るも食費が予算をオーバーの後、約2kmを歩いて那智ユースホテルに宿泊して魚料理を自炊した。26日「7：40発の＜熊交＞バスで那智の滝へ」（集）行き、信仰する「土地の人は『おたき』『おたき』という」（集）那智大社に参拝、絵葉書「国立公園那智山」を購入し、「（表）熊野権現 飛瀧権現 那智詣」「（裏）熊野権現 飛瀧権現那智大社」と書かれた袋に「飛瀧神社」「那智御滝 昭和35.12.26」の記念スタンプを押した。青岸渡寺滝見台からの絶景に犬塚君は有料望遠鏡に自慢の一眼レフをくっつけて、おたきの「望遠写真に夢中」（集）になるなど、一行は熊野の自然を堪能した。ここからがいよいよ本宮を目指す旅のハイライト、標高966Mの「大雲取山…山全体が杉と檜の美しい林におおわれ…那智神社の社有でむかしから斧を入れない処女林」（南紀、p12）の那智原始林の中、熊野古道の大雲取越を歩き33体の地藏が祭られる高倉山の地藏茶屋跡（集）辺りに差し掛かった時、「那智の滝から、旧熊野街道を歩いたんやが、築山先生の地図の見間違いで途中、道をまちがえて、工事現場の方へスタスタ。飯場のオッサンに『コラ！お前らどこ行きよんや。そっちはハッパかけとんやぞォ！』とどなれたが、お蔭で全員命びろいした」（昔、p6）と、危うく高倉の祟りに遭遇しかけた。26日夕刻「小口という集落では＜中村屋＞旅館に泊まったが、1泊2食付400円で、肉の水ダキかなんか食わしてくれた。今＜昭和45年＞から考えるとエライ安かったナァ」（昔、p6）と、遠来の珍客をもてなして頂いた女将の手料理を懐かしく回顧している。翌日「霜のおりた山峡の吊り橋をわたる風情はわすれられない」（集）小口を立って、途中しいたけ栽培や材木搬出用索道を珍し気に見つつ、小雲取を越え請川まで歩き、川湯温泉に宿泊した。「川湯巡では河鹿荘ちゅうユースホテルで自炊する予定だったが、旅館ばかりで商店がなく買い出しができず困った。やむなく犬塚が百姓家から野菜を分けて貰い、更に河口君が鶴屋、亀屋という二軒の旅館のうちの鶴屋の勝手へ行行って、野菜等を頒けてくれるように頼んだところタダでくれ

たので河口は意気揚々と引き揚げてきた。それを聞いた口の悪いヤツがいうには『おおかた河口のヒドイスタイルをみて“お可哀想に”と同情してくれはったんやろう』（昔、p7）とあるが、これを機に南紀好きになった当の本人曰く「むこうさんは心からの親切で<タダで>くれはったんや…あんな親切いまだその後お目にかかったことがない」（昔、p7）と旅館の親切なお嬢さんをベタ褒めしている。翌日本宮、瀧八丁、新宮速玉神社等を参拝したご利益か、丹鶴城址では珍妙な簡易ケーブルの現物に初遭遇、無事三山巡りを終え、熊野市の鬼ヶ城に一泊した。昨年開通したばかりの新鹿～三木里間を通過し念願の紀勢本線を完乗、陸の孤島と呼ばれた紀伊半島を鉄路で一周、関西本線・草津線を経由して帰宅した。

IV. 出羽三山で蒙った“天罰”

平成27年12月22日山形県西川町との地域連携協定締結で西川町役場を訪れた際、町内の月山酒蔵資料館をご案内頂き、当家ゆかりの山形交通三山線¹⁾の写真や資料展示を拝見、屋外に静態保存されている電車モハ103に再会できた。

筆者は昭和37年8月3日乗車中の間沢～寒河江行の山形交通バスを降りて三山線羽前宮内～間沢間に乗車した経緯は以下のように数奇なものであった。

まず8月1日庄内交通バス鶴岡～羽黒に乗り、[写真-2]のようにまず羽黒山に登拝し、羽黒山表参道頂上田村商店で購入した絵葉書「国立公園 出羽三山」の袋に「羽黒山登拝記念8.2」と「出羽三山登路」のスタンプを押して登山開始し、平清水小屋を経て7合目の合清水小屋に泊った。

翌朝弥陀原小屋、仏生池小屋を経て目指す頂上の「月山は修験道の山やから白装束に身をかためたオッサンが六根清浄と唱えながら登っていきよった…月山の頂上ではたしか拝観料とかの名目でナンボかとられた。その時例の名物男Tは『なんやしよーもない』といいながら社殿のす



【写真-2】 羽黒山神社に登拝する筆者（昭和37年8月1日）

ぐ横で□□□¹²⁾。バチがあたるんとちゃうかなどと冗談いうとると天罰テキメン、殺しても死な
んそんなTが下りのガレで足をすべらしネンザを起こして…アイタタ…と悲鳴をあげながら顔
を苦痛でゆがめ」(昔, p16)のクジキ事件を起こし、直後に湯殿山社務所詰めの屈強の修験者
に救助のご出動を乞い、格別の情けでお助け頂く羽目となった。不敬行為による天罰はこれだけ
でなく、湯殿山に参って仙人沢祈禱所に泊り、翌朝山形県側に下山する際に「当月中一のKが
間沢…でバスを乗りついた時、前のバスに全財産をいれたサイフをわすれた」(昔, p18)第二
の災厄が降り罹った。バス「車掌にいうたら、『すぐ並行して走っている山形交通三山線の電車
の駅におりて、すぐ間沢の営業所へTELすれば良い』というてくれた。そこで一行はバスの終
点寒河江で待ってもらうことにして、最寄りの羽前宮内ちゅう駅でおりて、すぐ駅員に話して
TELしてもらったらわりとすぐにみつかった。さっそく次の電車ですべて送ってもらうことにしたが、
予定の汽車にはのり遅れてしまう。あわてて時刻表をくって、この日の目的地の<宮城県>鬼首
までは行かれないが、鳴子までならなんとかなる。そこで寒河江駅にTELし、駅の放送で次の
汽車にのりよう伝言してもらうことにした。そしてオレは羽前高松で乗りかえ汽車にのり、う
まく連絡がついたか心配していたが、寒河江のホームでどやどやとワンゲルがのり込んできたの
でひと安心した。まあこれで財布もあったし、なんとか鳴子までたどりつけそうだし…」(昔,
p18)と安堵したのも束の間、第三の天罰を受ける羽目となった。目的地の鳴子駅には当初の予定
で16:53着、鳴子17:40発のバスで、最終目的地の鬼首・間歇泉18:24着の予定であった。しか
し実際に一行が乗った「次の汽車」では鳴子19:33着でバスはもうなく、駅弁で飢えを凌ぎ、宿
を探す羽目となった。「鳴子へかなり遅くなってついたが、仙台の七夕祭の最中とあってどの旅
館も満員。国鉄の鳴子駅から頼んでもらってやっと…部屋をつめてでも入れてやろうということ
になった。駅で地図まで書いてもらって…泊まったが、案の定ギューギューの超満員。他の者は
文句をいうヤツもいたが、頼みまわったこっちとしてはゼイタクもいえず…前日のTのクジキ
につづいて」(昔, p18)の“祟り”を痛感した。快適なキャンプに代わる旅館宿泊の結果、「駅
弁100×18=1800 鳴子駅でくったやつ¹³⁾」「宿泊費100×18=1800 鳴子滝川旅館¹⁴⁾」の想定外経費
が発生、“鬼”食料系の犬塚君は会計報告で「差引残高812円の赤字…小生の責任にあらず…赤字
が出ているが事実上は交通費へのさし廻し¹⁵⁾」などと、とぼっちりを弁解している。

V. 筆者自身の旅行方針・観光デザイン

筆者が中学・高校時代所属した体育会活動は「監督その他の面でどうしても無理があるので、
この際サイクリングも含むワンダーフォーゲル部にしよう」と先学期の末に同部の部長である築山
先生が同部に相談され部員も賛成だったのでワンダーフォーゲル部が誕生した¹⁶⁾という甚だ珍
奇なものであった。「ワンゲルの前身であるサイクリング時代からの古手」を自認する河口君の
回顧によれば過去の監督不十分という「充分なる反省の上にならなくて、野外活動の部のメリッ
トは残すべし」という結論に達した…まだ運動として確立されていなかったワンダーフォーゲルとい
うものを導入して…心身の鍛錬をし続けるのが是ということで、ワンゲルが創立された…車を捨て
て足で山、川、海、町をめぐる、見聞をひろめていこうというスローガンでスタートした」(昔,
p1)とある。筆者も河口君から「おもしろい部やぞ。あっちこっち旅行できるし…ワイラがヨウ
ケはいってメチャクチャやったろやないか」(昔, p2)と勧誘された。犬塚君も「ワイは小川
と加藤建と3人いっしょに入った。小川と並んで最も運動神経の鈍い方やったから、他の運動部
は無理やった」(昔, p2)と正直に回顧する。昭和35年3月末の改組当時に部長・築山先生は
主として徒歩旅行により「休暇を利用して野外へ出かけ社会体験を増す」17)こと、狭い生活圏

の「阪神間的視野を日本的視野に拡大し、更に広く世界的展望にまで発展させる」¹⁸⁾ことが創部の目的であると熱く語っている。社会的探究心を重視する創部の理念に基づき昭和35年7月には「ワンダーフォーゲル部員は部の主催する簡素な旅行を通じ次の諸目標の達成に努力しよう」として、「先づ吾が国土を識り、之を愛しよう」「広く社会を識り、視野を拓めよう」…「不撓不屈の気概を養成しよう」¹⁹⁾等十箇條からなる「部員心得」を制定した。『部員手帳』の編纂の任に当たった思想的支柱・犬塚君はヒットラーユーゲント時代の過ちなど「ワングルの意義そのもんがようわからなんだ。万有出版の『ワンダーフォーゲル手帳』ちゅうの買うてきて、色々ケンキューしたが、結局は皆んなでワイワイやっとするうちに、何んとなくこれがワングルかいなと思うようになってった」(昔、p2)と回顧している。こうした部内の大衆討議を経た共通認識としての「部員心得」の上に、その後の合宿での現場経験を踏まえ、筆者の文責で高校新聞に「ワンダーフォーゲル“渡り鳥”の生活紹介」²⁰⁾という題で投稿した。我が部の特色を、①「行動範囲がおそろしく広い」、②「文化的要素が含まれている」、③「いろいろの楽しい旅ができる」の三点に集約した。②に関し「その土地々々の風土、風習、気候、地理、歴史、生物…土地の人情やその土地のよさなどもわかる」として「種々のワンデリングを行なうだけではない。種々の文化活動一部誌を発行したり、写真展を開いたり研究発表を行なう」ものとした。

③に関して「部員心得」にいう「簡素な旅行」を敷衍し、「学生の時は学生のときしかできぬ旅をする方が楽しい…我々の目的地はいわゆる観光地を選ばない。そういうところはえてして観光地ずれしているからである。本当のその土地の人情や風習に接することがないからである。ちょっと行きにくいような、あまり行く機会のないようなところを目的地に選ぶ。知られざる観光地というやつである。いつでも行けるようなところへ行っても仕方がない」として、我々独自の史観に立脚した真正性を重視し俗流観光地を排する旅行基本方針を展開した。

このように中学・高校時代に筆者が貧乏旅行、即ちあえて快適・快速・効率を志向せず、徹頭徹尾低価格志向の旅の掟として、①江戸期の旅を理想として徒歩旅行が原則、②地を這うが如き鉄道の鈍行列車や公共交通機関たる乗合バスまでは許容、③有料急行・新幹線・タクシー等は処罰対象、④飛行機・マイカーなど、ブルジョア階級の乗り物は論外というような甚だ勇ましくもエコな内容であった。T君のように掟をあくまで遵守する者は仲間内で尊敬され、時流に流され掟を破った者は「墮落した」と批判された。

その後筆者も社会へ出て娑婆で墮落した人生を送るなかで、やむなく準急・急行・特急・新幹線あたりまでは乗車可能な屁理屈を考案して妥協の範囲を順次拡大して不本意乗車せざるを得ない場合も当然に生じたわけだが、その都度掟を破った破戒僧の心境を味わっている。鉄道によらざる「外道」に依拠するものは如何に安価で高速・快適であったとしても筆者の想定するあるべき旅行としての主観的価値が格段に低いと感じる。ましてリスクの高い飛行機・船等は全くの考慮外で、旧国鉄航路等を例外としてほとんど搭乗・乗船経験らしきものがない。(除沖縄旅行)

厳格な鉄道主義者の筆者自身が終生追い求めて来たベストな観光デザインは自らの主義に反する航空機、自動車、船舶等の競合交通手段を極力排した鉄道オンリーのエコな旅である。鉄道を衰退に追い込み、数多くの貴重な鉄道を可惜廃墟に陥れたガソリンを貪る“敵性”交通機関に塩を送る訳には参らぬ。さりとして今注目の豪華列車の旅に大枚を投じる気持ちは少ない。嗜好対象として心引かれる鉄道もかつて国家が建設した堂々たる官設大幹線でなく、山奥の赤錆びたレール、トロッコ、廃線跡等の草蒸す廃墟を探ね歩いて特殊の壮快を味わう“毛細管観光”で、甚だ貧乏趣味に流れている。かように安価な鉄道旅行に限定する偏狭な観光史観に到達した所以は上述した幼年・若年期の特異な旅行体験に由来するものと思われる。

VI. むすびにかえて

最後にコミュニケーション文化を主題とする本誌に敬意を表する意味で旅先で偶然に聞いた放送等のマス・コミュニケーションが筆者の旅情に及ぼした尋常ではない悪影響について実例を示しておきたい。平成29年8月28日午前6時東北出張中の筆者はテレビから突如発信されたJアラートなるけたたましい“空襲警報”に驚愕させられ、旅の物寂しい気分を吹き飛ばされた。場所は福島原発からも程近い山村の簡易な宿舎の食堂で、ささやかな朝食開始のタイミングであった。放送内容は弾道ミサイルが当地の上空を通過中で、地下街、地下室等に避難せよとの指令であった。なにせ山中の簡易建築物であり、近隣に堅固な鉄筋コンクリート建物もなく、まして地下街などありようはすもなく、途方に暮れるほかなかった。

実はほぼ同様な遠隔の地での希有な経験を56年前にも流れる怪電波によって味わされたことがある。ネットもスマホも皆無な当時の中学・高校生は情報源をもっぱらラジオに依存²¹⁾していた。

昭和36年8月3日深夜鳥取県の霊峰・伯耆大山の涼しい山中で就寝中、密かに傍受した北京放送臨時ニュースで激しい衝撃を受けた。おぼろげな記憶では「資本主義の圧政下で長年抑圧されてきた日本人民がついに今夜大阪で総決起し官憲と激突した」といった趣旨であったように思う。まるで教科書で習ったフランス革命のように直感した我々中学生連中は「えらいこっちゃ！大阪で“革命”が起こった！」「ワイラの家は大丈夫か？」「鳥取なんかのんびり旅行しとる場合か！」「すぐ山を下りよう」などと大騒ぎとなった。俗世のうさを忘れる目的ではるばる修験道の霊山までやって来たというのに、すは“革命”？という怪電波は一瞬にして我々を醜い現実社会に引き戻し、旅情も吹っ飛ぶ異常事態に突き落とした。しかし地元大阪の深い事情に精通した冷静な男もいて「場所は大阪のミナミやろ」「時期は8月はじめのクソ暑い最中…」「今ごろ決まって騒ぎ出す連中といえど…」といった具合に皆で推理を煮詰めて行き「そうや大阪の夏の年中行事のアレやろ！」という正解²²⁾を導き出した。

真っ暗な深夜の山中という情報遮断の下、当時のことゆえ遠く離れた“内乱”の真相を確かめる手段とて見出せなかった。確かに五千人ももの暴徒化した労働者が投石、放火を繰り返した大乱闘は北京放送がこれを奇貨としたように部分的には釜ヶ崎“革命”的要素も皆無ではない。デマの類に惑わされ軽率妄動しがちな中学生集団としては、断片的な情報を出し合ってまずまず妥当な判断を導き出せた方なのでは…と理解している。

本来は静寂な修行の場であるはずの伯耆大山での深夜の下界の騒動が結界を越えて浄域たる修行の場（＝野外活動の拠点）に持ち込まれた結果、当時修行中の我々の心が攪乱され、熊野、出羽三山ほどには当地の霊験なる印象が薄れたのであろう。部下の中学生集団の昨夜の大騒ぎに気付かなかった高校生N先輩の書いた公式記録には当日の「八月四日 午前五時三十分起床…（食事当番以外の）他の者は、シュラフの中でゴソゴソして、ねぼけた顔で『深夜放送を聞いたから、ねむいわい』²³⁾とだけ記載されている。

最後にかような山岳信仰を日本文化の継承という視点から考えると、出羽三山信仰では初登山「新行」の証として白装束に神社の御朱印を受け、苦難を共にした講員仲間を「同行」と呼び、記念の石碑まで建立し生涯の友とする風習²⁴⁾は今なお遠く千葉県下でも見られると報じられた。また京都から遙々聖地・熊野を目指す「大峰奥駈道」の山伏修行の紹介番組²⁵⁾でも「擬死再生」を願う行者集団が隊列を組んで危険な奥駈道・熊野古道を駈け、足腰を痛めた行者を先達らが支援・激励しつつ無事那智の御滝へ到着する様子がTVで放映された。

必ずしも深い山岳信仰・巡礼動機に基づくものではない我々の熊野、出羽三山の初「山駈け」以降に実体験を重ねて来た数々の稚拙な諸行動（地元からのご好意「御接待」を受けた遍路者の

感激に相当するものを含め)も先人達から受け継いで来た伝統的な風習などとは全く認識しないまま、期せずして自然に同根、同趣旨の類似行動パターンとなっていることに放送番組を見て驚かされた。

- 1) 王滝村での学外実習は磯貝政弘「長野県と本学の包括協定に基づく2大プロジェクト実施報告—王滝村の新観光戦略提案事業と峰の原ペンション村インターンシップ事業」『観光コミュニティ学部紀要』第1号、平成28年3月、p115~134参照。その他学外実習は拙稿「地域連携活動と学外実習の効用」『FDジャーナル』第16号、平成29年3月、p196~198参照。
- 2) 森林鉄道に関しては拙著『非日常の観光社会学—森林鉄道・旅の虚構性—』日本経済評論社、平成28年、p437~444参照。
- 3) 類似のランナーズハイ (Runner's High) はマラソンなどで長時間走り続けると非常に気持ちのいい状態になり、気分が高揚してくる生理作用をいう。類似のクライマーズ・ハイ (climber's high) も高所でのロッククライミングや雪山を登る際に興奮状態が極限まで達して恐怖感が麻痺して恍惚感や陶醉感を味わう状態のことをいう。いずれもモルヒネのような麻薬作用のあるβ-エンドルフィンが過激な運動で分泌が増すためと説明される。極限状態で千日回峰の行者が神仏と遭遇したり、遍路でお大師様に巡り遭うと伝わるのも同種の作用か。
- 4) 本稿では以下の類出資料に略号を使用した。[立山]…「紀行文 立山ある記—立山歩き—」昭和32年7月(「夏休みの生活日記」昭和32年9月提出)、[南紀]…『南紀Wanderung』昭和35年12月、[集]…『ワンダーフォーゲル写真集』昭和35年8月~昭和35年12月、[昔]…『ワングル昔語り(草稿)』(B4横、計23頁の未定稿)昭和45年12月。これは昭和45年6月クラブの後輩の史料管理課長K氏から「今までの全部の合宿の記録と一部の合宿の紀行文」等を内容とする『大ワングル史』を昭和35年結成10周年に当たる昭和45年に記念として編纂するから「御協力願いたい」との依頼を受け、総会の折に気軽に引き受けた。その後「原稿はどうなった」として「本年中に出せという、きつい催促をうけ、2~3日でデッチあげ」(昭和45年12月8日付送付状)メンバー全員に「これは単なるタタキ台」(送付状)として「修正、補足下さい」旨を送付、そこで犬塚、河口両氏ら複数メンバーが10数ヶ所を修正加筆した草稿である。
- 5) 高取山は高取神社をはじめ金高神社、猿田彦大神祠、妙見祠、石切劔箭大神、八幡大神、白龍大神、竈神など多数の社祠が鎮座する不思議なパワースポットとして知られる。
- 6) 近年観光社会学徒としての御用納めの一環として筆者の知見の典拠となる旅行体験を開示する責務があると考え、学外実習地は注1)前掲拙稿に、①昭和41年日本一周鉄道旅、②昭和42年復帰前沖縄船旅、③昭和45年大阪万博体験を各々学内紀要に執筆すると共に、平成29年12月の公開講座でも報告した。
- 7) 立山博物館学芸員の福江充氏の著書『立山曼荼羅』(法蔵館)によれば、「少なくとも戦前までは、この地域の男の子たちは、十六歳で立山に登れなければ一人前でない」と云われたとある。かつて越中の男子たるものは15歳、遅くも18歳までに立山に登拜して初めて一人前と認める風習があり、立山から帰って来るまで家族は行いを慎み無事を祈ったという。
- 8) パンフレット「室堂平内湯旅館みくりが池ホテル」。館主尾近八郎右エ門氏は土木建築の尾近組取締役(名刺)
- 9) 通称「高倉山」は大正9年破綻した日本積善銀行の破綻処理に際し預金者救済のため高倉家から提供された個人財産。オーナーの高倉藤平は大正6年和歌山県東牟婁郡色川村・小口村「那智の滝の奥なる雲取山の山林千五百町歩を買収…檜と杉の深山にして、実測概算無慮三百二十万本と算定せらるる…富源の開発は太古の神境に斧を入るものにて、無尽蔵なる宝庫」(『高倉藤平伝』、p283)と期待していた。
- 10) 「熊野古道沿いの元高倉山の中に33体地藏さんが祭られており、昔から私の地元口色川では毎年10月24

日に地藏祭りを致しております…地藏さんから隣の熊野川町小口に向かって、熊野古道を歩いて最初の峠が高倉峠と呼ばれ、唯一高倉の名が残っております」(那智勝浦町森林組合長久保逸郎氏のご教示)。高倉に関する拙稿は『金融ビジネスモデルの変遷—明治から高度成長まで—』日本経済評論社、平成22年、p.141～所収。

- 11) 山形交通三山線は三山電気鉄道として大正15年12月23日羽前高松～海味間がまず開業し、昭和3年間迄まで延長、昭和18年に戦時統合で高畠鉄道、尾花沢鉄道を合併し山形交通と改称、社長に設楽規矩三郎が就いた。筆者は昭和45年11月2日に再訪したが、昭和49年11月18日廃止された。創業以来工藤三九郎らと三山線を支えた設楽家(西川町睦合)の家業が月山酒造であった縁でモハ103が保存された由。
- 12) その後改心し専ら社会公共の安寧に尽瘁する彼の名誉のため特に名を秘し、伏せ字とした。
- 13) 14) 15) 「東北ワンデルン会計報告」食糧係責任者犬塚京一、昭和37年9月。当報告の時代性は購入食糧細目の貧困さはもとより、①大半を神戸三宮のダイエーに買出しに行き、「当初、ダイエー調達分をマトメて書いていた」、②1袋3っ入「チキンラーメン @85×21=1,785円」を主食?並に大量購入、③赤字の原因として嫌疑がかかった「ボーリングは近年非常に盛んで…東京でしたボーリング代は全て小生の友人(男)が払った」と釈明する点。
- 16) 17) 昭和35年4月29日灘高新聞①。
- 18) 19) 犬塚京一編著『部員手帳』昭和36年2月、p3, 6。
- 20) 昭和35年11月28日灘高新聞②。同じ紙面に「O」の筆名で筆者が「清滝・高雄も俗化」と題して中学三年の洛西「遠足の思い出」を寄稿したかと記憶する。この文中「落合に出る途中、山の中腹に愛宕電車の跡であろうと思われる鉄橋」と愛宕山鉄道鋼索線の産業遺産にも言及する点から、中学三年にして廃線跡に異常な興味を示す筆者の寄稿で間違いあるまい。「ここで昼食をすませ、清滝の静寂にひたろうとしましたが、ここもご多分にもれず俗化して、静寂よいまいずこ…もし日曜であつたら人で人でひどいものだったでしょう」ともつばら世俗を忌避し高踏的立場を鮮明にするなど部の旅行方針③との思想的整合性が認められる。
- 21) 山陰合宿の携行用冊子にNHK周波数として現地鳥取、松江両放送局の各KCを載せていることからもうかがえる。例えば宮城県でキャンプした時、「ちょうど夜の7:00、当時割と有名だったラジオ神戸(現ラジオ関西)の『電話リクエスト』という番組がはじまる時間…半信半疑ながら携帯ラジオのアンテナをイッパイのばして耳をすますと、例のテーマミュージックが東北の吹上高原まで聞こえてきたので、思わず神戸がなつかしくなった」(昔、p20)といった具合。
- 22) 因みに昭和36年8月4日読売新聞朝刊11面は「釜ヶ崎三たび流血の乱闘 双方で百九十人ケガ」と題して、「暴徒はヤジウマも加えて約五千人、一部の先鋭分子は署内になぐりこみをかけたり、警官隊に投石、アパートに放火…装甲車を先頭に断固たる実力行使に出たため双方入りまじっての乱闘となり…百九十六人の負傷者をだした」と「第一次西成騒動」を報じている。
- 23) 中河原一秀執筆、『クラブ紹介小冊子』昭和36年、p12。
- 24) 平成26年2月28日放送『新日本風土記 出羽三山』NHK。(平成30年1月3日再放送)
- 25) 平成27年12月27日放送『わたしの“奥駆道”をゆく—山伏修行5日間』NHK。(平成30年1月4日再放送)